The Japan Society of Educational Sociology

「不登校」をめぐる社会運動における＜運動ナラティブ＞の領有—不登校体験記の分析を中心に—

森　啓之（慶應義塾大学大学院）

1. 問題設定

既存の社会学的不登校研究は、教育行政や心理臨床専門家等に注目し、「不登校」に関するクレイムの展開を描写してきた(樋田 1997)。また物語論に立脚する論考は、人々の間で保持される物語形式や、その物語を生み出す社会的状況に言及してきた(北山 1999, 瀬戸 2001)。しかしそれらの論考は、個別的なコミュニケーション空間において、いかに「不登校」をめぐる意味付与がなされ、またその空間の人々が、意味付与された対象を、いかに領有しつつアイデンティティ形成を図るのかという点への焦点化が不十分であった。その研究背景のなか、山田(2002)は、親の会というコミュニケーション空間において、その会の心理臨床専門家の言説の影響下、親の会参加者が、いかに「不登校」へ意味付与をしつつ、アイデンティティ形成するのか描写する。しかし山田の論考は、親の会のフィールドワークに基づくものであり、その専門家の言説の社会的背景を十分に描き得ていない。親の会というコミュニケーション空間においても、当該社会における文脈依存性は否定し難く、その空間が受ける社会的処遇や歴史的背景を詳細にみて行く事が必須といえる。

以上の先行研究を踏まえ、本研究目的は次の2点である。1点目に、「不登校」をめぐる論争の「場」やそれへの参与者が明瞭である「場」、その様な意味産出過程や意味付与のダイナミクスが、ある程度のまとまりを持って表出する「場」に注目し、その「場」が、社会的・歴史的状況の中で、いかなる処遇を受けるのか掘り下げる点。2点目は、その「場」の参与者は、そこで意味付与された対象をいかに領有しながら、自らのアイデンティティを形成するかを掘り下げる点である。

本論は、その様な「場」の1つとして、「不登校」をめぐる社会運動に注目する。その運動は、「登校拒否を考える会」や「登校拒否を考える全国ネットワーク」というかたちで相互連携し、不登校の肯定性を主張してきた。全国的な組織状況や、定期的抗議集会といった活動の恒常性等、その社会的影響力からみると、不登校を問題視し治療・矯正・管理対象化しようとする勢力に強力に対抗し続けてきた反差別の社会運動である。

先行研究は、同運動を、不登校を治療・矯正・管理対象とみなす教育行政や心理臨床専門家等の勢力と対立的に並置し得る1つとして注目し、不登校の肯定性を主張する「一枚岩」の存在と捉えてきた。しかし社会運動という「場」への参与者は、その様に1つのあり方に収斂しない。運動体が示す「価値」に共鳴しそれを領有するあり方には、幾つかのものが想定され得る。

この点は経験的社会運動の実証分析に蓄積を持つ社会運動研究の議論が参考になる。ベンフォード(Benford, 2002)は、潜在的/顕在的社会運動参加者が持つ2つのナラティブという分析枠組みを導入する。1つは「運動ナラティブ」で、もう1つは「参加者ナラティブ」である。運動ナラティブは、運動体に関して、またその運動体が変革を希求する社会に関する目標・典型的エピソードを含む。参加者ナラティブは、参加者個々の運動経験やそれに関連する内容を含む。両者の間には、後者が前者の形成を助けるリフレキシブな関係も存在する。しかしアメリカの平和運動体を事例としてベンフォードが経験的に示すのは、どの様な「分権的集団」(ibid.:66)でも、運動ナラティブが参加者ナラティブを規定し方向付ける面(「ナラティブ・コントロール」)である。社会運動の中心的成員は、潜在的/顕在的な運動の担い手に対し、運動体の主張や運動体自身への関心を誘発し、その担い手の経験の意味付けを行う。

ベンフォードの議論から得られる視座は、次の点である。社会問題化された現象をめぐり、運動体が顕在的/潜在的な運動の担い手に示す主張(＝運動ナラティブ)に、それらの担い手が共鳴し領有する場合でも、そのあり方(＝参加者ナラティブ)には、ある程度の幅が存在する。それは、その主張への批判・反論ではなく、賛同する場合でも賛同のしかたに幾つかのあり方が存在する。アイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる反差別運動でいえば、運動体は、因習的に否定視されるアイデンティティを肯定的なものへと書き換えを図る。そして被差別者が、肯定的に書き換えられたアイデンティティに共鳴しそれを領有する場合、そのあり方は一様ではない。領有する点については「一枚岩」でも、いかにそうするかに

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ついては「一枚岩」ではない可能性がある。

また運動/参加者ナラティブは、同時に「パブリック・ナラティブ」(Davis 2002:23)からも解放されず 3 つは相互に関連する。個々の現象がいかに語られるかは文脈依存的であり、運動ナラティブが、その置かれた社会で、いかなる処遇を受けるか検討する事を通じ、運動ナラティブの輪郭をより鮮明に浮び上がらせる事ができる。

本論は、社会運動研究から以上の示唆を得て、同運動をとりまく社会的・歴史的状況を概観し、その運動ナラティブを領有する者たちの声をみる。

2. 運動をとりまく社会的背景

同運動の展開を概観すると、その萌芽は 1970 年代に発足した「希望会」である。希望会とは、不登校する子どもの保護者が作った親の会である。それは、国立国府台病院の中に生れ、同病院の渡辺位氏を中心に活動していた。そして、その希望会を契機として 1984 年に「登校拒否を考える会」が生まれる。その後、登校拒否を考える会は、各地の親/市民の会と連携し「登校拒否を考える全国ネットワーク」を生み出す。その運動発展に中心的に関わる奥地圭子氏は、1983 年出版の渡辺氏の著書について「『登校拒否 学校に行かないで生きる』は登校拒否の歴史を変えた本といえる。それまでいろいろと出版されていた本は登校拒否を治す発想の本だった。ここではじめて、登校拒否を受けとめ、肯定する本が出、流れを変えていったのである」(不登校新聞 2002 年 9 月 1 日)と述べる。その「登校拒否運動」(奥地氏 1991:294)は「治療主義・訓練主義」(ibid.:294)に反対し、親の会活動にフリースクール/フリースペース活動等を加えながら展開する。(略)

3. <運動ナラティブ>の抽出

同運動の運動ナラティブを抽出する上で、不登校新聞創刊から続く連載記事「相談」を中心に分析した。不登校新聞とは、同運動と関係する全国不登校新聞社が発行する不登校に特化した情報を提供する媒体で、同運動の中で機関紙的役割も担う(2004 年 6 月 15 日号より「Fonte」と紙名変更。紙名変更に伴い連載記事「相談」は終了したが、記事形式を変更した新連載記事「Q&A」が 2004 年 7 月 1 日号から開始された)。連載記事「相談」は、例えば、子どもが学校に行かなくなったがどう接するべきかといった読者が持つ多様な質問が寄せられ、それへの回答において適切な対応法が示される。質問は、不登校する子どもの保護者や不登校する子ども本人等から寄せられる。「相談」の回答者は若林実氏(元小児科医)、多田元氏(不登校新聞名古屋支局理事)、奥地圭子氏(東京シューレ代表)他の、同運動に中心的に関わる人々である。「相談」に寄せられた質問へ回答者がいかに回答するかをみる事により、同運動の運動ナラティブ、言い換えれば、その「場」の参与者による領有の対象となるものをまとまったかたちで抽出できる。

「相談」の分析から、回答には渡辺位氏の「不登校」・「登校拒否」認識枠組みの影響が存在すると分かる。また同運動における肯定的不登校観も顕在化し、それは「既存の学校への意識的・無意識的批判としての不登校」「不登校を有意義なものと肯定する」「学校経験の傷を癒す」「その子らしさの回復」「既存の学校以外での主体的な学びや成長」「不登校後の積極的な生き方の組み立て」等の内容が含まれる。

4. <運動ナラティブ>領有のあり方

運動ナラティブ領有のあり方は、同運動やその関係する人々が発行する不登校体験記を資料として分析した。そして「相談」の回答で示される声に、体験記で示される声が共鳴し領有する面と、そのあり方を幾つか見出し得た。

そのあり方の一部を示すと次の様になる。例えば不登校の肯定性に関する言明に注目すると「“開き直り…というより、学校を休んでいることに自信を持つ”ということ」(セルリアン 1993)と、不登校の肯定性を基調とする領有がみられた。しかしその一方で「今まで世間と違うことはいいことと思いながらも、つい世間の要求に合わせた方がいいのではと揺れていた私でした。……自分が納得すれば世間の目なんてどっちでもいいと余裕もでてきました。私は私らしく、頑張りすぎず、納得できることを見極めて生きていこうと思えるようになりました」(大河原氏 1995)と、単に不登校の肯定性を示すのでなく、また不登校を否定視もしない、<探求>を基調とした領有も存在した。前者は「①不登校開始・葛藤(悩みⅠ)→②不登校肯定(悩みⅠ解消)」が表出し、①を乗り越え②に至る事が可能と示される。後者は「①不登校開始・葛藤(悩みⅠ)→②不登校肯定(悩みⅠ解消)→③不登校肯定という思いの揺らぎ(悩みⅡ)→④探求」が表出する。後者は、①から②を経験したが、それのみによって自らの状況を説明しきれず、①から④までが表出している。悩みⅠと悩みⅡは、③を経由している点で異なる。(略)

(運動をとりまく社会的背景、連載記事「相談」と不登校体験記の分析結果/件数、分析資料選択理由等、省略部分を含む詳細な説明、また引用資料・参考文献表は当日配布します)

NII-Electronic Library Service